



桐生ロータリークラブ週報

2005年

国際ロータリー第2840地区 2004-2005年度 国際ロータリーのテーマ



CELEBRATE ROTARY

R.I 会長 グレン E. エステス・シニア

善意というものがいいなら
ロータリークラブは唯の社交クラブだ。
職業は金儲けのためでしかなく、
社会奉仕というも施しにすぎず、
国際奉仕は外交以外の何ものでもない。

パストガバナー 前原 勝樹

会長 前原 正一 幹事 養田 隆

クラブ会報・広報委員会 堀 明・金子篤郎・塙越紀隆・須永博之

2月21日号

第2512回例会

(2月14日㈪ 第2例会)

1. 点鐘
2. ロータリーソング齊唱
3. 来訪者紹介
4. 委嘱状の伝達

2005-2006年度 国際ロータリー第2840地区

ガバナー諮問委員 吉野 一郎君
ガバナー補佐 森 喜美男君

広報・オンラインコペンハーゲン委員会

委員 坪井 良廣君

ライラ委員会 委員 蓮 直孝君

5. 出席100%表彰
6. 会長の時間
7. 幹事報告
8. 委員会報告
9. 卓話「生涯学習桐生市民の会によるまちづくり」
—近代化遺産の活用。富岡製糸場
ユネスコ世界遺産登録との連携を見据えて—
生涯学習桐生市民の会 歴史を歩こう委員会
委員長 西坂 一夫 様
10. 点鐘

ようこそビジター

〈卓話者〉 生涯学習桐生市民の会 歴史を歩こう委員会 委員長 西坂 一夫 様

出席100%表彰

牛脇 章君 18回



幹事報告

- わたらせ養護園より「第36回香西かおりチャリティショー」に対する礼状が届いております。
- 桐生南、桐生西、桐生中央、桐生赤城、足利東の各RCより週報到着。
- 2月23日(木)のRI100周年桐生5RC合同例会は、会長幹事会にて全員登録と決定致しました。

委員会報告

出席委員会

本日の出席(平成17年2月14日)：総員62名・出席45名
平成17年1月31日例会修正出席率：76.00%

ニコニコボックス

宮野英世君…バレンタインデーに義理チョコをもらって／前原 勝君…西坂君の来訪：卓話を歓迎して／牛脇 章君…出席100%／佐藤富三君…結婚祝／野間義弘君…誕生日祝

会長の時間

- 青森県七戸町、RCメンバー石井淳夫様から友2月号の記事「私のロータリー」のことでおほめの電話をいただきました。
お名前を聞きもらしたので、会長からこの文書をお渡しください、との事。電話をしたのは、雑誌委員会の前原委員長でした。

卓話



「生涯学習桐生市民の会 によるまちづくり」 生涯学習桐生市民の会 歴史を歩こう委員会 委員長 西坂 一夫 様

はじめに生涯学習の歴史について簡単に説明をさせていただきます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、生涯にわたる学習の必要性が唱えられるようになったのは、1960年ごろアメリカやヨーロッパの成人教育者達の間から「成人教育の期間を拡張して、これを生涯の間に広げよう」という声を上げることから始まります。こうした運動を新しい教育理念にまで高めようと動き出したのがユネスコの成人教育関係者達でした。中でもアレオンとラングランが中心となって協議を重ねてきた結果1965年にユネスコの成人教育推進国際委員会において発表されたのが生涯教育理念でした。

一つは教育に年齢の制限はありません。（生涯にわたり学ぶ機会を提供する）

二つは教育の学校独占に終止符を打つ。（教育現場を社会全体にいきわたらせる）

三つ目は落ちこぼれのない教育をする。（学校教育だけで人を評価しない）

四つめは個性や独自性を実現させるには、伝統的な教育には限界がある。（国民国家を作るための近代教育システム・同質な人間をより多く作るシステムではなく、未来に向けての社会を築き上げる為にはるかに適した教育システムを築き上げる。）

この4つの理念です。

この理念はラングランの後継者であるジェルビルに受け継がれ人間的発展を獲得する為の生涯教育は如何に在るべきかを次のような4つの項目。

自己決定学習・動機に答える学習・教育計画への市民の参加・労働と教育との結合。

に纏めてその必要性を提言しました。

桐生市は全国的に見ても大変生涯学習活動が盛んであると評価され多くの社会教育関係者から注目されています。毎年桐生市の生涯学習システムを研修するために多くの方が訪れています。何故でしょうか？桐生には生涯学習活動をリードする人たちがたくさんいるからです。市民参加の生涯学習への道を開いた初代会長大西康之氏。その道を整備して新たな活動に向けて指針を示した2代会長松島宏明氏。その指針を生かしながら新たな時代に相応しい活動を行っている現会長の丹羽泰氏がその代表です。生涯学習桐生市民の会の活動には初代会長が掲げた理念が脈々と受け継がれています。それは桐生の生涯学習は、市民が自発的に行うあらゆる学習活動はまちづくりの実践にいかれるものである。という考えです。市民自らが自らの意欲で学習し、そのことを実践の場で試し、その経験を通じた試行錯誤の繰り返しそがよりよい社会創りにつながる。つまりは学習活動が人を作り、まちづくりにつながる。という考え方です。ですから桐生の生涯学習に対する考え方の基本がまちづくり・人づくりとなるのです。

桐生の生涯学習は、今ある教育施設や環境の統合のみならず、伝統と進取の精神の統合という形で実践しようとしているところであります。道は遠くなかなか具体的な形に結びついでいませんが、この考え方自体は誤っていないと考えます。それでは現在の生涯学習桐生市民の会の活動目標である、桐生を好きになる子をはぐくむについて簡単に説明いたします。

現在の若い人はノイズに弱いと多くの精神科医や社会学者が指摘しています。ノイズとは自分の意のままにならない情報という意味です。子供の減少、家庭内における個室化した自己空間。暖かく自分の行動を先回りしてまでケアしてくれるお友達よりもはるかに頼れるお友達の両親。こうしたきわめて狭い空間とその世界を中心として育ってきた子供たちは自分にとって意にならない事柄に出会った時、非常にもうろく感情的反応するそうです。

社会生活を営むときにやってくる様々なノイズに押しつぶされそうなとき、耐えきることが出来るでしょうか。人は社会的な存在なのです。社会の中で自己存在の肯定と他者からの承認を必要とする生き物なのです。そのことを私たちは忘れてはいけないと思います。ではそんなノイズに対して耐性を持った子供たちを育てるために何が必要で何を整備していくべきでしょうか。そこで生まれたスローガンが桐生を好きな子供を育むのです。それは子供たち自身が成長過程の中で肯定的に故郷を感じ取る事の出来るまちにしていくということです。そして自己のよりどころとなる何かをどんな些細なものでも良いから生まれた場所で発見させてあげることの出来るまちにしていくことです。彼らのよりどころになるもの、それは必ずしも桐生で生まれた偉人達とは限りません。親子でまた友達と遊んだ祭りや近所の原っぱで遊んだ体験を持つことでもよいのです。登下校の最中に見つけた一厘のきれいな花といった些細なしかし本人にとって何事にも変えがたい風景を作ること。そのことが桐生を好きな子供たちを育むことにつながります。またスポーツ活動やボランティア活動などを通して様々な幼少から老人までの学校では考えられないほどの各層の人々が集まり社会的な約束を学んでいく場を持つことは大変重要なことであると考えます。その活動自身からも郷土愛が芽生えてくるのだと考えます。この目標に向け生涯学習桐生市民の会では様々な委員会が活動しています。こうしたことからも生涯学習活動はまちづくりであり人づくりなのです。次に私が生涯学習市民の会で携わっている歴史を歩こう委員会について説明します。

歴史を歩こう委員会では今までいくつかの事業をおこなってきました。はじめに桐生のまちほどのような経緯をたどって町並みが形成されていったのか、近世の歴史を学習して、有鄰館で桐生新町サミットを開催しました。そして桐生の町の歴史を探ると共に未来に向けて桐生はどのような街づくりを行っていくか、その方向性を話し合いました。その後、錦桜橋の架け替えに伴い風景としての錦桜橋を目に焼き付けておこうとの思いから解体前の錦桜橋を渡り、この橋がいかに誕生し現在に至ったかを学習し、二回の錦桜橋写真展を開催しました。また堤や元宿の開墾を行った生き神様である今泉忠房の祠を見学することを中心て桐生駅や西桐生駅周辺の歴史散策をおこないました。この時に市役所や両駅周辺に近代化遺産が残されていることに多くの参加者が知りました。そして現在、近代化遺産について学習をしているところです。そしてこの近代化遺産のすばらしさを多くの市民の方に知つていただきたく3月26日の土曜日に、「織都を育んだ近代化遺産」を訪ねるバスツアーを企画しています。是非多くの市民、とりわけ中学生や高校生に多く参加していただければと考えています。

最後に、何故中央商店街の活性化が必要なのか？まち旅企画を行うのにあたり近代化遺産の活用は出来るのか、また何故必要なのか、将来の桐生のまちづくりに繋がっていくものなのか？そもそもこうした活動の意義はどこにあるのか…

人が優しく生きがいをもって生活するに好ましい他者との共生を前提とした新たな地域コミュニティの形成と地域アイデンティティーを支える場所、いわゆる地域の顔として商店街の存在は今後重要な地位を占めるものとなると考えます。なぜならば商店街にはそこで暮らす人と人が生活感を持って商いをする空間を長い間をかけて築き上げて来た歴史があり、見知らぬ他者がお客様として現れコミュニケーションを新たに作りだしてきたノウハウがあるからです。そこにはいやがおうでも人間の温もりを感じてしまう空間が蓄積されてきました。こうした空間は人々が生活し、交流してきた中で積み上げられた空間でしか作り上げることが出来ません。

点から線、線から面への連携と構築が成立立てことで個々の近代化遺産は際立ち、躍動感を持って輝き始めます。群馬の気候、風土が育んだシルクに代表される織維産業を切り口に富岡製糸場を世界遺産登録に向けての活動を突破口として、近代化遺産群や関連施設を連携させていくことは近代とは如何なる時代であり何を築き上げてきたのかを世界に向けて発信することが出来る群馬県は近代を知るための最良の地域となるのです。

ポスト近代化時代を作り上げていくためのキーワードであるユニバーサルデザインの考え方を取り入れ、近代化遺産をITが中心的な役割を果たすだろうポスト近代化社会のシステムで管理することが出来るまちになればと考えます。生涯学習桐生市民の会歴史を歩こう委員会やファッショントウン推進協議会、その他様々な市民活動団体はそれぞれの立場で近代化遺産の活用を考えていけばよいと思います。

それぞれがそれぞれの立場で近代化遺産の活用を視野にいれて行動すること、まさに近代の象徴でもある自立した個人がそのツールを活用し役割を担って市民活動のネットワークをゆるやかに連携されることが今必要とされているのだと思います。これこそが近代化をいち早く成し遂げ自治の精神を持ってまちを作ってきた桐生人の伝統であると思います。